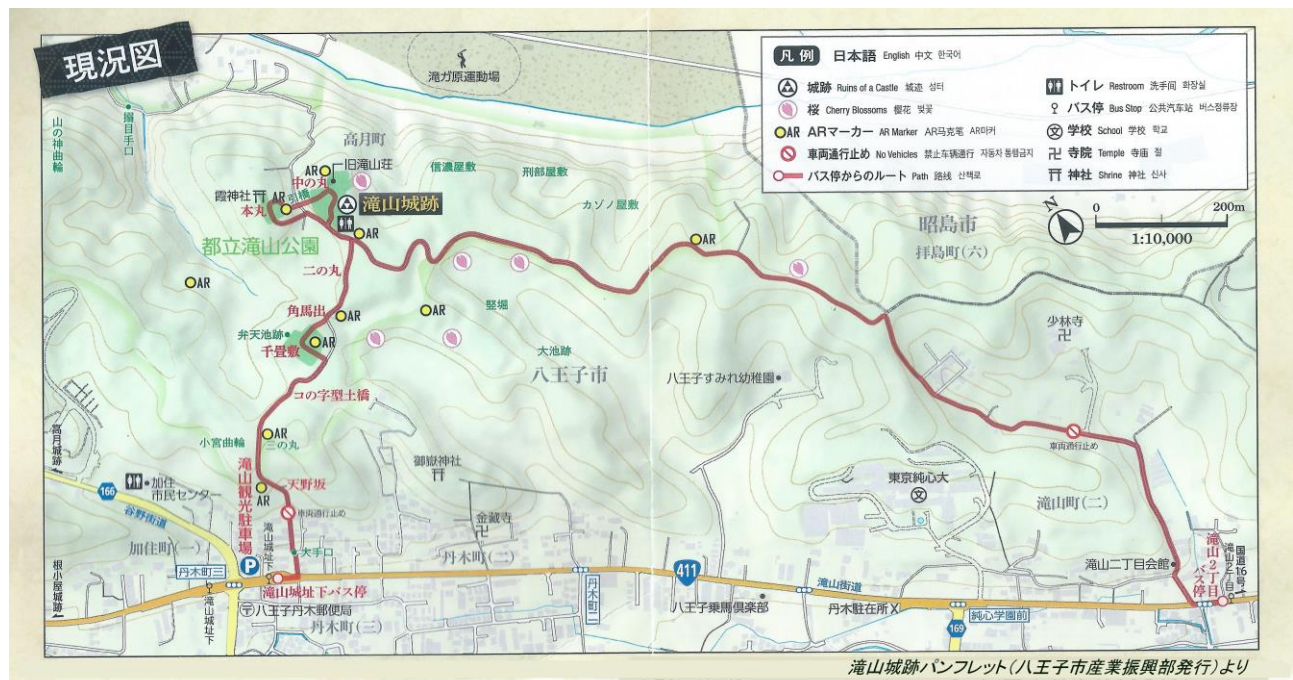




八王子滝山城跡散策

鎌田正彦



1 年半に及ぶ新型コロナの非常事態宣言から解放された10月2日(土)、スニーカー履きで滝山城跡の散策に出かけた。当日は台風一過の秋晴れで一人のんびりと歩いた。

12時30分 JR 八王子北口から戸吹スポーツ公園入口行きバスに乗り、ひよどり山トンネルを経て約20分で滝山街道の「滝山城址下バス停」に到着した。滝山城は多摩川と秋川の合流点から1km下流に位置し多摩川と谷地川に挟まれた標高160mの加住北丘陵の尾根に築かれた中世の山城である。北側の多摩川によって浸食された急峻な断崖と南側の専国谷戸、鍛冶谷戸等概雑な地形が自然の要害となつている。1521年武蔵守護代の太田氏氏が築城し、その後小田原から勢力を拡大した北条氏の支城となった。1559年から1567年にかけて城主北条氏照は次々と城を改修、拡張し屈指の堅城となつた。今年で築城から500年になり、国指定史跡として一帯は都立滝山自然公園となっている。春は桜や山ツツジの名所として多くの人々が訪れている。

バス停からすぐに大手口にさしかかり、空堀や土塁を見ながら天野坂を5分ほど登ると左に城の西側・北側の守りを固める小宮・山の神曲輪方面、右に城の南側の守りを固める二の丸方面に

至る分岐点に着いた。左方面への山道を行くとすぐに左側に小宮曲輪がある。ここは家臣屋敷の跡地とされている。さらに踏み跡程度の細く曲がりくねった尾根道を15分程度進むと山の神曲輪で道は行き止まりになる。その先は敵の侵入を拒む高さ70mの断崖になっている。多摩川の向こうには狭山丘陵、埼玉所沢球場までも展望が開けている。来た道を分岐点まで引き返すと三の丸がある。周囲三方を空堀で囲まれた高さ10mほどの台地になっており草木が茂っている。外周を巡る踏み跡を5分ほど歩いて元の分岐点に出た。二の丸方面に進むと左手に城内で最も広い草原の千畳敷がある。ここは当時役所的なものかあったとされている。さらに右手方向には本丸、中の丸の守りを固める二の丸が有り、その南側に深さ15mにおよぶ空堀が続いている。

堀の先は行き止まりの大馬出(曲輪の出入り口に備えられた出撃用の広場)になっており、ここでふくろのねずみとなった敵兵を上から槍、弓矢、鉄砲で攻撃する仕掛けになっている。この丸には3カ所の虎口(曲輪の出入り口)があり、すべて馬出(広場)を備え城内で最も防御性に優れた曲輪である。二の丸から先の1段高い広場に中の丸がある。中の丸は本丸に次ぐ重要な施設があったと考えられ北側の守りを固めていた。現在この場

所には昭和の時代に国民宿舎とした使用された平屋建ての旧滝山荘が残っている。城の最奥にある本丸への出入り口は中の丸との間に架けられた木橋(引き橋)を渡って入る枡形虎口(直角に曲がって敵の直進を阻む構遣の出入り口)と、南側に設けられた枡形虎口の2カ所がある。特に木橋は10mを超える深い大堀切の上に架けられており、中の丸に敵が押し寄せて来た場合は引き落として簡単には本丸にたどり着けない構造になっている。本丸は城主北条氏照の住居があったと考えられ当時の大きな井戸が残っている。本丸の北西側には枡形虎口があり、その先の出丸には馬出があり強力な防御態勢を整えている。このように滝山城は複雑な地形に加え曲輪や空堀で周囲を固め様々な工夫を施し、1569年北関東への進撃を狙う武田信玄の2万の軍勢からの猛攻に対し北条軍は2千の兵で城を守った。

15時に本丸南口の枡形虎口から2の丸を経て信濃屋敷、刑部屋敷、カゾノ屋敷の跡地を見ながら「かたらい

の路滝山コース」に出た。なだらかな尾根道で左側の木々の間から多摩川の流れや
拝島の市街地を眺めながら滝川2丁目交差点まで歩いた。東京純心学園からバスに乗り16時に JR 八王子駅北口に着いた。

滝山城は戦国時代初期の城で我々がイメージする水堀や頑丈な石垣、何層にもそびえる天守閣や櫓は無く、自然の地形を利用し盛り土、土塁、空堀、館で構成されたいわゆる「土の城」で、周囲は本の柵で囲まれた砦のようなものであったと思われる。ちなみに当時の八王子には、「～城」、「～館」、「～邸」と称される地元有力者の14もの「城」があった。中でも滝山城は城の守り、規模の大きさから関東一の堅城とされている。また滝山城の近くに多摩川沿いの地形を利用した高月城や根小屋城があり滝山三城と称されている。この秋には是非訪れたいと思っている。

以上 2021 年 10 月 21 日



Fig-1: 自然を生かした土塁や空堀、曲輪跡を見ながら戦国時代初期の山城を登ってゆく。

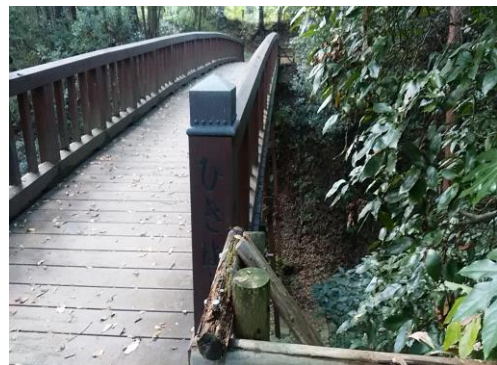


Fig-3: 深さ15mの空堀上に架かる木橋は、敵襲来の際には取り外して本丸への行く手を遮る事ができる。



Fig-2: 敵兵が空堀を進んで行くとその先は行き止まりの曲輪になっている、行き場を失った兵の頭上から弓矢や槍で攻撃し強固な守りを固める。



fig-4: 壮大な天守閣や石垣等の建造物がまだ無い時代の山城の日常生活を支えてきた井戸が今も残っている。



fig-5: 多摩川の 70 m の崖の上にある本丸からは対岸の拝島の市街地や、遠く埼玉の丘陵地まで視界が開ける。戦国時代北条軍2千の兵で武田軍3万の兵を追いやった地形の利がうかがえる。

山行報告

富士塚めぐり

江古田富士・中里の富士塚

近藤善則

久しぶりの富士塚めぐりである。梅雨の合間をぬって、なんとか降雨をのがれて実施することができた。今回は年に3回しか登拝することができない、江古田富士と、大泉の中里の富士塚を訪れた。



西武池袋線の江古田駅で集合(13:00)。さっそく駅の北口前にある浅間神社の境内へ。

本殿横に普段は閉ざされている鉄柵の奥に江古田富士の登り口があり、一合目、二合目・・・と石標に沿って登る。高さ 8m のあつというまの登頂であるが、実際に富士山に登ったのと同じご利益があるとされ、山開きの7月1日には、列をなして登拝者が絶えないとのことだそうだが、今回は朝からの雨が影響したのだろう、幸か不幸か登拝者はまばらであった。



江古田浅間神社の富士塚

富士山や神奈川の大山に登拝しに行く富士講や大山講などの山岳信仰者の集団が古来より練馬区にもたくさんあり、この江古田の富士塚は江戸時代後期に下練馬村、中新井村、中村で構成される講によって天保10年(1839年)に築かれたとされている。富士山の溶岩で固められ直径約30mで都内では大きい部類の富士塚で国の重要有形民族文化財となっている。正月3日が日と例大祭の9月第二土日。そして今日の山開き7月1日。年に3回だけ鉄柵が開けられる。

雨上がりは特に虫がまわりつくのだろう、入口の社務所前で虫よけスプレーをかけてくれた。濡れた登拝路を慎重に登り終え、神社の拝殿でコロナ禍の早期終焉と登山の安全を拝む。



江古田富士をあとに、次の目的地「大泉の中里の富士塚」に向かう。

江古田駅より大江戸線の新江古田駅へ徒歩で向かう。ところでこの江古田という地名の読み方に古くから面白い対決があり、現在もその火種が残っていることは興味深い。西武線の江古田駅は「えこだ」と読む。一方都営大江戸線の新江古田駅は「しんえごた」と読む。「えこだ」と「えごた」の違いは中野区と練馬区の地域の由来にも遠因があるようだ。江古田駅の所在は練馬区旭ヶ丘1丁目、一方新江古田駅は中野区江原町でどちらも江古田地名ではない。江古田と称する行政上の地名は、中野区江古田1丁目から4丁目があり「えごた」と読む。つまり練馬区では「えこだ」、中野区では「えごた」が大方の区画のようだ。



当然、江古田富士は Ekoda Fuji ということになり、向かう先は sin-Egota である。

その新江古田より光が丘に向かい、さらに地域バスで、目的地近くへ。

中里の富士塚は別名「大泉富士」といい都内最大規模の富士塚といわれ、練馬区大泉の八坂神社脇にある。高さ12m径が30mで、文政5年(1822年)の石碑があることから、江古田富士よりもさらに古くからあったようだ。



中里の大泉富士

別荘橋というバス停で下車、八坂神社の参道の奥、拝殿右の小高い塚がそれと一目でわかる。南面の小径を合目石に従いながら急な坂を登る。道祖神や富士講の石碑が立ち並び、意外にも本格的な山道を感じさせる。頂上の剣ヶ峰は広く見晴らしがよい。あいにくの曇天で

あったが、晴れていれば本物の富士山も見えただろう。

再び来た時と同じ地域バスで光が丘に戻る。少し手前の光が丘公園入口で下車。公園の中を散策しながら光が丘駅に向かうとする。

光が丘は旧グラントハイツ(アメリカ空軍家族宿舎)が1973年に米国から返還され、東京都の公園と団地となったところ。小生が小学生の頃、有刺鉄線の柵が壊れかかってそこからハイツの中に侵入できるところがあって、何人かの仲間と探検隊と称して恐る恐る中に入った記憶がある。見張り台に監視人がいて、射殺されるぞと誰かが言ったのか、あわてて逃げ帰ったりしたが、

そこは全くの異次元の世界だった。今思うと懐かしい思い出でもある。

都営大江戸線の光が丘駅で解散。今回2箇所の富士塚めぐりはコロナ禍にあって、つつましく中味の濃い探索であった。

2012年7月1日 13:00~17:00

参加者:4名(大西、鎌田、棚橋、近藤)

コース: 西武池袋線江古田駅~江古田浅間神社(江古田富士)~大江戸線・新江古田駅=光が丘駅(バス)=別荘橋~八坂神社(中里の富士塚)~別荘橋=バス=光が丘公園西口~光が丘駅 解散

一コラム一

「峠のシェルパ」

熊谷友昭

列車で軽井沢に向かう時は、横川駅で何分か停車し、その間に峠の釜めしを買い求め、その後ゆっくりとした速度で軽井沢へ向かっていたことを覚えていますか。この区間は鉄道で最も急な勾配区間です。そして、この区間を「峠のシェルパ」という愛称で呼ばれた大きな馬力の電気機関車が連結され、登坂時は列車を押し上げ、また降坂は安全に下るためのブレーキをかけていました。

鉄の車輪は、一回滑り出すとその後の操縦が厄介ですので、機関車の運転士(機関士と称す)も安全で時間通りに運転操作が出来る“ベテラン職人”が務めておりました。

さて、シェルパと言えばチベットの山岳地帯に暮らす民族の総称で、ヒマラヤ登山には彼らの力が必要です。このことから、この機関車を「峠のシェルパ」と言われるようになったとされています。現在は、長野新幹線(北陸新幹線)の開業により、この区間は廃線となりました。

次回は先代の「峠のシェルパ」の話題に……。

熊谷友昭



シリーズ

分水嶺を越える県境・市町村境

—越境する山と溪—(3) 三国峠と上信国境 (前編)

富永 滋

今は国道17号で上信国境の三国峠は、明治32年に長野回りの鉄道で魚沼地方に入れるようになるまで、三国街道を行く旅人が歩いて越える難所であった。全国に数多い三国山など三国とつく地名は、幕藩制における三国境にあてられたものだが、上信国境の三国峠は二国の界を成すばかりである。この謎に対する答えは、江戸時代の国絵図により解決する。江戸時代、さらに下って明治20年頃まで、三国峠は群馬・新潟・長野三県の界だったのである。

古来、信濃川における長野県と新潟県の境界は明確であった。元禄国絵図を見れば、千曲川右岸は志久見村までが信州、支流の志久見川を堺に宮原村から千曲川は信濃川と名を変え越後となる。信濃から来る川だから信濃川なのである。国境をなす志久見川は、約4km遡った長瀬で二流に別れ、長瀬から三国峠までの間、複雑な地形を横切る国境の位置は図上では全く不

明である。信濃図、越後図とも地形を正しく把握できておらず、国境はあつてなきが如くに見える。少なくとも、もし峰切りなら越後に属するはずの領域に信濃が大きく食い込んでいることだけは間違いない。しかも信濃が食い込む範囲は、現在の三国峠が長野県に含まれないことからして、江戸時代もしくは明治初期と現在とはかなり異なっている。分水嶺を新潟県側に越境していた長野県の領域のうち、現在、東部は失われて新潟県となり、中～西部だけが長野県のまま残っている。

江戸時代の信濃国の、赤石山～三国峠間の中央分水嶺の北側で自然地形を無視して越後側に派出していた部分の正確な範囲は、幕府の命により作成された国絵図ですら不明確であった。慶安元年(1648)頃の正保信濃国絵図では、地形自体が把握できておらず、秋山郷奥の山々は曖昧で山名がなく、赤石山は全く離れた位置に描かれ、中津川の水源として認識されていなかった

た。元禄 15 年(1702)の元禄信濃国絵図では山や川の名が記入されたが、「此志久見川ヨリ三国峠迄之間山国境不相知」とされ、千曲川の志久見村から三国峠まで明確な国境が確定されていなかった。天保 9 年(1838)の天保国絵図では山川が多少詳しく描かれるようになり、魚野川は図の途中で途切れて水源が上州にあることが暗示された。天保図には現在の岩菅山の位置でなく魚野川左岸に岩菅山と記入されているが、現在でも魚野川の水源地は「岩菅」であることから、付近一帯が岩菅山と呼ばれていたのであろう。現在の岩菅山の位置に「岩すご山」(岩巣護山)と記されているのは、貞享 5 年(1688)まで幕府の御巢鷹山であったことと関係しているのかも知れない。また魚野川から分かれるセン沢は信濃領として認識されておらず、当時から野反池が上州に属していたことは疑いないと見られる。



図1 長野県の三国峠方面越境域(破線は現在の県境、紫線-長瀬-赤石山は分水嶺、桃直線-長瀬-三国峠は明治初期の県境(詳細未確定のため仮に直線で表示)、緑線-中央分水嶺が群馬側に食い込む箇所)

出典: 国土地理院「地理院地図」

国絵図においては、人が住む集落の帰属は明確であった。長瀬で二分した志久見川の左俣(志久見川本流、現在の釜川)は越後領に入って前子、出浦、烏帽子と越後の小村を抜け、帰属不明の山中に消えている。しかし釜川の上流に進むと、平太郎、五宝木は長野県に属し、源流部の五本木山も永く信州領であったことから、釜川上流は信州に属すると見てよいだろう。東隣の中津川では、信濃川出合から大赤沢までが越後、廃村となった矢櫃、甘酒、現存する村としては小赤沢からが信濃であった。国境が、現在と同じ大赤沢と甘酒の間にあったことは、秋山紀行の「此村(註: 小赤沢)の枝甘酒

村」の記述や、甘酒を長野県とする明治 11 年の長野県地図から見て取れる。秋山紀行の付図では甘酒村を越後としているが、甘酒村の位置を間違えて作図したことによる恐らく誤認であろう。

中津川から三国峠にかけては、完全な無住地帯のため境界の目安となる村がなく、国境が尾根や川を横断しているため地形的な自然の境界もないので、国境は極めて曖昧であった。元禄国絵図作成時の国境確認調査時の記録を見ると、まず元禄 12 年(1700)に、信濃、越後、上野三国の代表が三国峠に立ち、そこが三国境であることを確認している。現在の地図に馴れた我々は北が新潟、南が群馬であり長野が入る余地がないように思えるが、当時の国境は千曲川の志久見村から三国峠までおよそ直線的に引かれていたので、湯ノ沢、清津川を横切って県境が小赤沢に向かっていることに対し、誰も疑問を持たなかったことであろう。翌 13 年(1701)、調査団は信州秋山郷から上州長井まで三泊四日で国境山岳地帯を踏破した。一泊目は「いり久保大岩」(エラクボ平上の大岩山あたりか)、二泊目、三泊目は「三国峠相続候深山」すなわち三国峠へ続く尾根上の山中で野営したとしており、地理的に考えると二泊目が佐武流山～白砂山の間、三泊目が上ノ倉山～セバトノ頭付近と推測され、稲包山付近から西川を下って永井に達したと想像される。山間部での具体的な記述が全くないことから、彼ら自身何処をどう通ったか正確に把握しておらず、山名、川名を特定できぬまま、方角を頼りに尾根の連なりに従って永井へと抜けたのであろう。その後彼らは、上州側の山麓の村で山の位置と名称の聞き込みをしながら草津へ向かうが、前衛の山に隠れて目的の山が見えなかったり天候不順であったりして、十分な目視確認が出来ぬまま、草津峠を越えて信濃に戻った。

中央分水嶺の個々の山の認識がこの程度であったから、ましてや清津川、セバト川、湯の沢の上流を横切る信越国境の位置や付近の山の帰属は、全く不確かなものであったに違いない。その象徴が「赤石沢山」である。この山は、元禄の調査報告にも国絵図にも、また明治初期の堺村山林簿にも現れる清津川源流地域の主要な山であるのに、位置が全く不明である。信州の山であるのに信州領からの道がなく、遠望することすら出来ない幻の山であったことだろう。天保国絵図では、上信国境でなくセバト川右岸の赤湯山辺りに描かれたが、明治期の山林簿では稲包山と三国峠の間の上信国境にあるとされた。だが記事内容からして稲包山は上ノ倉山～セバトノ頭付近と考えられていたらしく、従って赤石沢山は現在のセバトノ頭～稲包山辺りになるようだ。しかし明治中期以降の地図では、実態不明なこの山は図上から消えてしまい、結局どの山を指すかは不明なままである。

同時期に、信州側からは形状的に山と認識されず名称を持たなかった苗場山が長野県地図に記載され始め

るなど、上信国境付近の地理が次第に明らかになりつつあった。それでも過渡期である明治期には、出版者により県境が様々に描かれた。小松原が県境／新潟のいずれか、苗場山が長野／県境／新潟のいずれか、稲包山が信越国境／上越国境のいずれか、そして三国峠が三国境／上越国境のいずれか、地図によって少しずつ異なっていた。一方、新潟県図では、清津川は棒沢山付近までを新潟県としてその上流側が長野県であることを示唆するなど、比較的明瞭に県境を示していた。現在棒沢山と呼ばれる山はないが、図を見る限り、仙ノ尾峯(唐沢三角点 1503.9m)かフクベノ峰(1570 独標)辺りを指していたようだ。明治 22 年に開湯した清津川上流の赤湯温泉は江戸時代後期の発見というから、少なくともこの辺りまでは従来から越後に含まれていたと思われる。しかし清津川源流へ至る長野側からの道はなく、長野県の権勢が及ばぬ空白地帯であったことが、陸地測量部の点の記の記述から推測される。三等三角点「木ノ根宿」(新潟県湯沢町大字三国内、湯之沢上流左岸の 1774.9m)の所在が「群馬縣上野國吾妻郡澤田村大字四万字木ノ根宿」と記されており、少なくとも明治 40 年に調査した担当官には、そこが長野県もしくは新潟県との認識はなかったようだ。大正 2 年、新潟県当局からこの三角点は新潟県内にあたるとの通知があった旨、欄外に注記されている。昭和 10 年に岩根常太郎が、四万の案内人は国境の向こう側の湯ノ沢まで知っている

が、浅貝の案内人は手前しか知らないと言ったことから、当時群馬側の実質的な利用が新潟側にまで及んでいて、そのため新潟県内の三角点に木ノ根宿地籍が付けられた可能性も考えられる。

清津川源流の県境が曖昧だった明治時代に、いち早く山岳地帯の最深部を把握し、管理した機関は営林署である。新潟側では、明治 19 年に設立された六日町小林区署(大正 13 年より六日町営林署)が、管轄する魚沼地方に林道網を整備した。上越国境付近では、恐らく中世の古道を転用したと思われる浅貝から三坂峠の湯ノ沢林道、赤湯から清津川右岸をセバト川出合まで辿り四ツ石の尾根に取り付き大黒ノ頭付近の国境に至る四ツ石林道(正式には赤湯幹線林道)などが知られ、六日町営林署が清津川流域の

全域を管轄していたことが分かる。一方長野側では飯山営林署が、昭和五年前後に赤倉山～佐武流山～白砂山、前後して野反池～堂岩山～白砂山、エラクボ平～檜俣川～佐武流山、大倉坂～大倉山～堂岩山の林道を拓いた。これは飯山営林署が中津川流域を管轄していたことを示している。このように、陸地測量部よりも詳しく現地の地形を把握していた営林署では、当時から現在と同じ県境が意識されていたようだ。

(後編につづく)

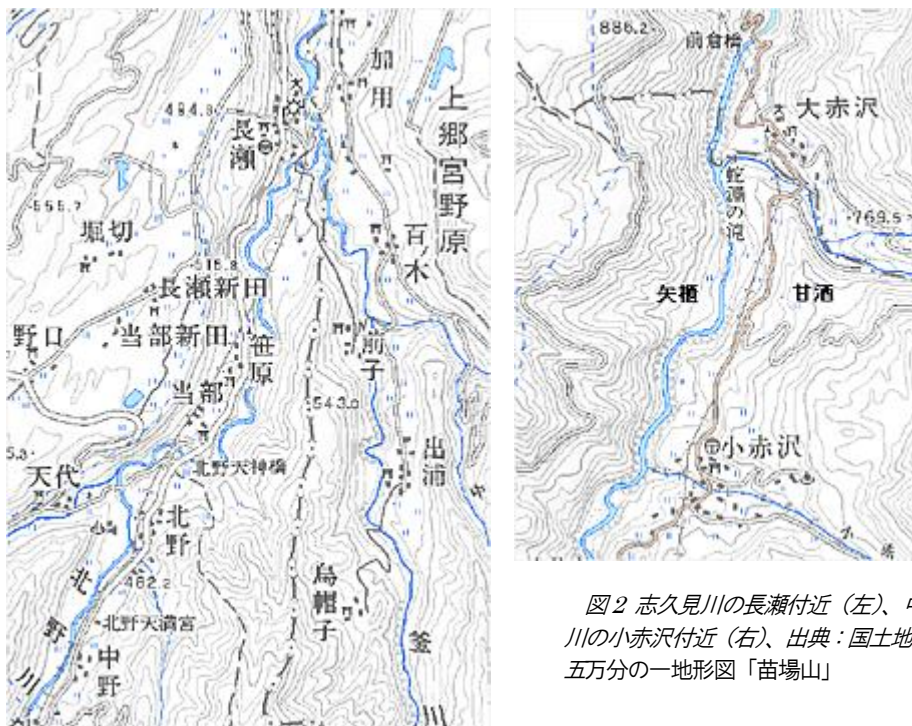


図2 志久見川の長瀬付近(左)、中津川の小赤沢付近(右)、出典:国土地理院五万分の一地形図「苗場山」